



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM



博物館だより

Nagano City Museum

第111号

収蔵品紹介



写真1 銅銚・石製模造銚

今回の博物館だよりでは、長野市立博物館の収蔵資料を紹介します。特に、昨年度から今年度前期にかけて新しく寄贈・寄託・購入したものをご紹介します。

1 銅鉾・石製模造鉾

まずご紹介するのは、市の指定文化財でもある銅鉾と石製模造鉾（写真1 表紙）です。近年博物館の所蔵となり、現在は常設展示室に展示しています。昭和8（1933）年に篠ノ井塩崎の松節遺跡から耕作の際に偶然発見されたもので、円形の石囲い炉の中に並べて埋められていたようです。

銅鉾（矛）

全長 20.2cm、幅 4.8cm で銅鉾の鋒部分にあたります。弥生時代後期の広形銅鉾とする見解もありますが、全体の形状が直線的であり、一段階前の弥生時代中期の中広形銅鉾である可能性が高いものと思われます。残存部分には樋は認められません。

先端から両面中央部に鎬状の突帯が縦方向に残されていますが、これは鑄出したものではなく、もともと断面偏菱形の身を突帯部分を残して平らに削り出したものであることが、平坦部にその痕跡と考えられる削痕が残されていることや、突帯の位置が表裏ですれていることなどから想定されます。この再加工がもともとなされていたものなのか、折損後になされたのかは不明ですが、他に例を見ない痕跡です。現在のところ長野市内で出土した唯一の弥生時代青銅製武器型祭器です。

石製模造鉾

銅鉾を模造した石製模造鉾として市の文化財に指定されていますが、磨製石剣の可能性が高いものと思われます。材質や側縁刃部・断面の形状から縄文時代晩期の石剣を再利用したものと考えられ、全長 19.8cm、幅 3.2cm です。

基部は石剣折損後に平らに研ぎ出しを行っ

ており、鋒も刃状の研ぎ出しを行っています。これも当初もっと鋭い鋒だったものが折損し、その部分を再度研ぎなおしている可能性が考えられます。柄部分は石剣の刃を両側縁ともに平らに研いで刃つぶし加工を行っており、弥生時代に磨製石剣として再利用したものと考えられます。

従来これらの資料の時間的位置づけについては、弥生時代後期とする見解もありましたが、銅鉾が後期の広形銅鉾ではなく、中期の中広形銅鉾である可能性が高いこと、石製模造鉾が縄文時代晩期の石剣を再利用した磨製石剣である可能性が高いこと、さらには中野市柳澤遺跡での弥生時代中期の銅鐸・銅戈埋納遺構の検出などを考慮するならば、これらも弥生時代中期栗林式期の所産として考えることが可能であり、今後、長野市の弥生時代を研究していくうえで貴重な資料といえることができます。（千野浩）

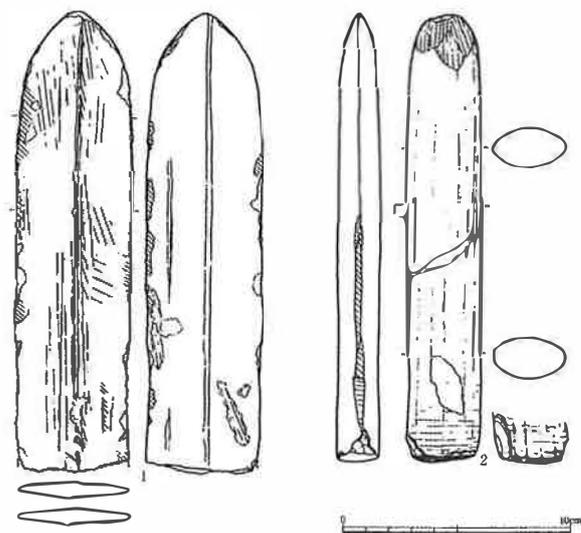


図 銅鉾(1) 石製模造鉾(磨製石剣)(2)
長野市誌編さん委員会編 2003
『長野市誌 第12巻 資料編 原始・古代・中世』より転載

2 雛人形



写真2 古今雛(男雛)

次にご紹介する雛人形は、昨年度、長野市若穂綿内の個人から寄贈されました。一つの木箱に、3組の男女の雛人形、1組の五人囃子、隨身、食膳、屏風、押絵雛などが納められていました。

古今雛と五人囃子

写真2と3の男雛と女雛は明治時代から大正時代に作られたと推定される古今雛です。古今雛は、江戸時代後期に江戸で町方向けに作りだされ、人気を博した雛人形の形です。写実的な顔と裳唐衣(公家の女性の正装)風の衣裳が特徴です。男雛は28.0×33.0(cm)、女雛は25.0×29.0(cm)です。

寄贈時、男雛は女雛用の飾りをかけており、様々な付属品が組み合わされていたことがうかがえます。(女雛が持つ扇は、写真では逆に開いてしまっています)

木箱には五人囃子も納められていましたが、この五人囃子も顔の作りなどから古今雛と同時期のものと考えられます。



写真3 古今雛(女雛)

享保雛

古今雛の他に、享保雛が2組納められていました。2組共、江戸時代末期の人形と思われます。享保雛は、面長で公家風の衣装、女雛は大きく膨らんだ五衣などが特徴です。江戸時代享保年間から明治時代まで流行したとされる形式の雛人形です。

1組(写真4・5 次頁)は比較的大きい人形です。男雛が28.5×26.0(cm)、女雛が30.0×27.5(cm)(冠含む)あります。この享保雛には底に写真6(次頁)のような商標ラベルが貼られています。「入善仕」は仕入先を示し、「善」は吉徳(江戸浅草)の商標です。「五番」は人形の規格を示しています。「五番」の上が空白になっていますが、最高級品の場合はここに「極」(極上の意)という字が入ります。この商標ラベルから、吉徳が扱い、江戸経由で売られた人形であるということがわかります。長野市内の別の家からも、このラベルがつき、同じ作りの人形が寄贈されており、長野市内にこの人形を江戸から購入するルートがあったことがうかがえます。



写真4 享保雛 (男雛)



写真5 古今雛 (女雛)



写真7 享保雛 (男雛)



写真8 古今雛 (女雛)



写真6 享保雛 商標



写真9 享保雛 商標

もう1組は小ぶりの享保雛 (写真7・8) です。男雛が15.0×12.0 (cm)、女雛が12.0×14.0 (cm) (冠含む) と、手のひらに収まるかわいらしいサイズです。男雛の鼻

は欠けていました。写真では外してありますが、寄贈時には女雛には別物と思われる手がつけられていました。このような状況から、何代かに渡って使われたと想像することができます。こちらにも商標ラベルが貼られています (写真9)。「よし善」というところが仕入れていたということがわかります。墨書の「七分」は規格を示しているのではないかと思います。5段や7段の雛飾りが広く普及するまでは、何組かの雛人形をまとめて飾り、収納するのは、よくみられることでした。この木箱に納められた3組の雛人形も、そういったもののうちのひとつだったのでしょう。

3 庚申講道具



写真15 七瀬南部庚申講 掛軸

七瀬南部の庚申講

長野市七瀬の南部では、10年程前まで庚申講の祭事が行われていました。七瀬南部の庚申講では、年に一度、夜に当番の家に集まり、掛軸を懸け、念仏を唱えながら数珠回しをしていました。庚申講が絶えたために、これらの道具が博物館に寄贈されました。

かつて多くの人々は十二支と十干を組み合わせて月日を表していました。庚申講とは、これらの組み合わせで月日を表した場合の庚申（かのえさる）の日や年に集まり、祭事などを行う集団や集会のことです。庚申の日の晩には、眠らずに夜をあかす風習がありました。かつてはこれを皆で行う形で庚申講が行われていたと考えられています。後には様々な形で庚申講が執り行われるようになりました。現在の庚申講の形態や祭事の内容、講員が副次的に担う役割は地域ごとに違い、多種多様です。市内にも多くのバリエーションがあります。講の祭事の他に、葬儀の際に墓穴を掘る役割や出棺の手伝いをする講などが多くありました。しかし、七瀬南部のように庚申講で数珠回しをしていた事例はあまり見られません。

七瀬南部の庚申講は、かつては10軒ほどが加入していたといわれています。それが次第に減り、最終的には5軒となり、祭事を行わなくなってしまいました。近年は、七瀬南部と同様に庚申講がなくなることが多くなっています。

寄贈資料について

庚申講の祭事で最も大切にされてきたのは、掛軸でした。祭事の際に掲げるものです。寄贈された掛軸（写真15）には、中央に悪鬼を踏みつける青面金剛、右に香炉を持つ右方童子、左に笏を持つ左方童子、そして四夜叉

や猿、鶏が描かれています。これらは庚申講の掛軸に登場する典型的な要素です。他の地域には、これらの要素のうちいくつかは欠けているものもありますが、七瀬南部のこの掛軸には要素がすべて揃っています。庚申の晩は、三尸（さんし）と呼ばれる虫が体から出てきて、その人の悪事を神に告げ、寿命が縮んでしまうと考えられていました。虫が寝ている間に抜け出さないように、庚申の晩は寝ずに夜をあかしていたわけですが、青面金剛はその虫を除いてくれると言われ、庚申信仰の本尊とされていました。そのため、庚申講の掛軸の中央に描かれています。猿と鶏は、講が申の日に始まり、酉の日に終わるために描かれます。猿は目や耳、口をおさえ、「見ざる 言わざる 聞かざる」のポーズをとるのが定番の形です。本図もそのように描かれています。

この掛軸には、裏書があります（写真16）。



写真16 掛軸裏書

「奉開眼供養 青面金剛尊像 一軸 翠山謹画」「萬延元年庚申七月庚申日 善光寺別当 大勸進権僧正堯淳」と書かれた紙が貼られています。これは、掛軸を仕立て直した際に古い掛軸に書かれたものを切り取り、貼り付けたものです。掛軸の来歴を示していると思われるかもしれません。箔付けのために書かれた可能性も否定できませんが、市内所縁の絵師や寺院によって製作開眼されたということ伝えていきます。

掛軸の他には、箆や大数珠、一升杓、講帳があります。

大数珠は数珠回しで使ったものです（写



写真17 大数珠

真17)。箆は講で集まる際に講員が使ったもので、一升杓は米を集める際に使いました。講帳は、講の取り決めなどが書かれ、昭和17(1942)年からのものが残っています(写真18)。この講帳からは、庚申講を年に何回行うか、年会費をいくらとするか、祭事は何時から行うか、といったことが書かれています。

これらの資料からも、長野市の庚申講の多様な形を考えることができるでしょう。

(樋口明里)

今回ご紹介した資料は、常に展示しておくことはできませんが、企画展示や常設展示の展示替えの折に、様々な場面で展示をしていきます。

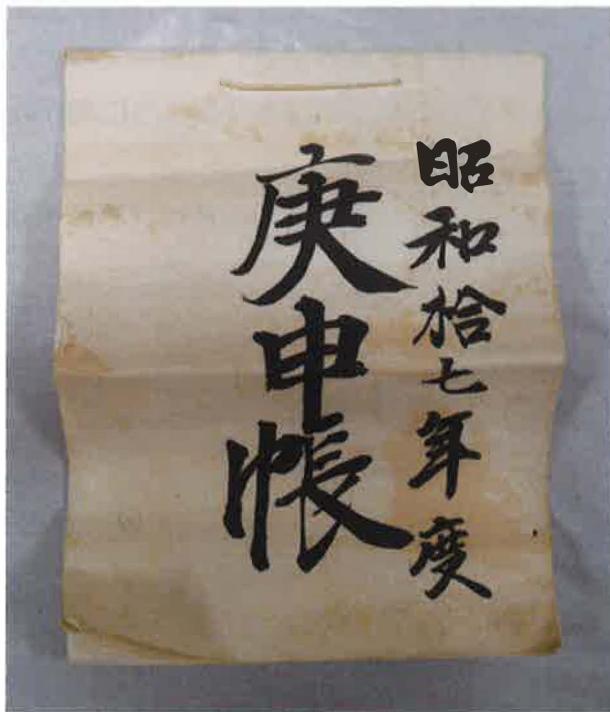


写真18 講帳

博物館だより 第111号

発行日2019年9月27日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL: 026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠板原3400

TEL: 026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL: 026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL: 026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL: 026(262)2500